2019 年度「第 66 回国際理解・国際協力のための高校生主張コンクール」

公益財団法人日本国際連合協会会長賞受賞

「世界の平和のために日本と国連ができること～過去を心に刻む～」　後藤 莉子さん

私は中学生のころからチェロを習っています。私が尊敬するチェリストは、もちろん、20 世紀最大のチェリストといわれるスペインのパブロ・カザルスです。カザルスの生きた時代は、スペインやドイツにファシズム政権が成立し、やがてヨーロッパが戦争の渦に巻き込まれていく時代でした。

私は 2 年前にドイツに長期留学しました。ドイツを留学先に選んだのは、あのナチスドイツを生んだドイツが今どうなっているか知りたかったからでした。ハンブルクの高校に留学して一番驚いたのは、徹底的にディスカッションやプレゼンテーションを行い、みな真剣になって自分の意見を発言する歴史の授業でした。「なぜ大きな世界大戦が二度も起こったのか」「国民はなぜヒトラーを支持したのか」などについて調べてきたことを発表し、意見を述べ合うクラスメイトの姿に私は圧倒されました。

帰国後、学校の海外研修でポーランドに行く機会がありました。その時に訪れたのがアウシュヴィッツ強制収容所です。展示室では 2 トンもの女性の髪の毛が山積みになっていました。髪を切られガス室に連行される女性の姿を想像したとき、私の胸は張り裂けそうになりました。

どうして人間はこのような残酷なことができるのか、アウシュヴィッツからクラクフに帰るバスの中で、私の頭は混乱していました。そのとき思い出したのがこのような問題に対して徹底して議論していたドイツでの歴史の授業でした。

ポーランドから帰国して日本の生活に戻りましたが、次第に学校での歴史の授業に違和感を感じ始めました。日本の歴史の授業は一方的な講義形式で、受験に必要な知識のみを教えられます。これでは戦争や平和に対しての問題意識は育ちません。ドイツの授業との違いを見せつけられ日本の教育はこれでいいのだろうかと疑問を抱くようになりました。

過去を振り返り、判断力を養う大切さを説いたのはアウシュヴィッツの日本人公式ガイド、中谷さんでした。「皆さんは、何のために勉強しているのですか？将来、いい大学に入るためですか？皆さんは、社会の動きを見抜く判断力を身に付けるために勉強しているのです。二度と過ちを繰り返さないために。」
私は、将来、歴史の教員になり、若い人たちの中に歴史を観る判断力を育てたいと思っています。しかし、今、その壁になっているのが各国の「歴史教科書」だと感じています。

私は提案します。過去に戦争をした国同士が、戦争の原因を検証するために、共同で歴史教科書作ることを。この試みは、すでに、ドイツとポーランドでは始まっていますが、両国の歴史認識を乗り越えるのは簡単なことではありませんでした。この時、両国の歴史学者の間に入り、この作業を促進して教科書の刊行までに導いたのが、国連のユネスコ委員会でした。

今こそ、国連の役割が必要なのです。私には夢があります。いつか世界共通の世界史教科書が国連によって作られ、世界のすべての高校生が、この国連版世界史教科書を使って授業をしているという夢が。その教科書は、若者の判断力を養い平和を実現するための教科書です。

このことを国連に働きかける役割を担うのは日本でなければなりません。なぜなら、日本は戦争の加害者でもあり、被害者でもあり、そして唯一の被爆国だからです。日本は、平和を実現する使命を持っているのです。私も、その一人です。

私の大好きなパブロ・カザルスは、1971 年、94 歳の時、国連総会で「鳥の歌」という曲を演奏しました。その時の短いスピーチで、カザルスはこう語りました。「私の故郷カタルーニャの鳥たちは、大空に舞い上がるとき、こう歌うのです。Peace,Peace ---.」

カザルスが生涯、訴え続けた Peace－「平和」。本当の平和を実現するために、私たちは、過去をしっかりと心に刻み、今を判断する眼を養わなければなりません。希望の未来を築くために。

Global View 63 号（2019 年 11 月 22 日発行）より

今回ドイツ留学、ポーランド友好訪問で得た経験をもとに弁論をしました。ドイツでの歴史の授業やポーランドで訪問した「アウシュヴィッツ強制収容所」で感じたこと、そして「世界平和」を実現するために根本的に変えていくべきことは何なのかを自ら模索し、様々な文献を読んだことで歴史に対する認識や自分の意見をしっかり見つけることができた半年間でした。私は様々な体験や白百合での講話会などを通して、戦争や貧困についての知識をしっかりと身に付けることができ、今回の弁論文を考えるにあってよい糧となりました。

弁論文を考え、発表練習をしているうちに自分は戦争で亡くなった方やアウシュヴィッツ強制収容所で亡くなった方の「代弁者」としての自覚が芽生え、中央大会ではそのことを強く意識しました。その結果「日本国際連合協会会長賞」を受賞することができました。この半年間受験と弁論大会が重なり辛く、苦しい時期もありましたが様々な面で私を成長させてくれた大会であり、達成感を充分に味わうことができました。そして、2020 年 3 月にニューヨーク国連本部などを訪問し、関係者との懇談を予定しています。そこでしっかりと意見交換をし、将来につながる学びを得たいと思っています。

この半年間「簡単な道を選ぶな。もしかしたらとても難しいことかもしれないが、変化を求めるなら大変な道も必要。自分自身を信じろ。いろんなことに挑戦しよう。」と自分に言い聞かせていました。自分に変化を求め、簡単な道ではなかったこの半年を多くの先生方や仲間と共に乗り越えられたことに感謝しています。これからも日本そして世界の平和を大好きなパブロ・カザルスのように強く訴え続け、私ができることを行っていきます。

高校卒業後、立命館大学文学部国際文化学域へ進学しました。